

カナダ地誌研究の課題

大石 太郎*

A Note on the Regional Geography of Canada

Taro OISHI

要旨：本稿では、将来のカナダ地誌作成の第一歩として、カナダ地誌研究の課題を探ることを目的とし、基礎データに基づいてカナダの特徴を概観し、現代カナダをとりまく諸要素を提示した。そして、カナダの特徴をふまえると、カナダ全土ないし北アメリカというスケールでの説明に加え、諸地域に区分して地域の特徴を明らかにしていくことが必要になるとの認識を示した。

Abstract :

In this paper, as the first step for describing the regional geography of Canada in the near future, the author discussed Canada's characteristics based on principal data, and showed some components of contemporary Canada. Due to Canada's characteristics, in addition to the national (Canadian) and continental (North American) scale, it is necessary that we describe regional traits of Canadian regions.

キーワード：カナダ、地誌、地域理解

I はじめに

カナダは主要国首脳会議の一員であり、国際社会を構成する有力な国家のひとつである。しかしながら、日本において十分に理解が進んでいるかという点、必ずしもそうではないというのが実際のところであろう。大学生を対象としたある調査(2006年)によると、カナダのイメージとして「寒い」、「広い、大きい」、「豊かな自然、自然に配慮」、「イギリス系住民とフランス系住民」、「ケベック独立運動」が上位を占め、さらに「緑が多い、森林が多い」「メープルシロップ」「カエデ、カエデの葉」と続いており、どちらかといえば自然的特徴からくるイメージが強いことがわかる(田林 2007)。これには、学校教育の影響はもとより、マスメディアにおけるカナダの扱われ方も

かかわっていると考えられるが、現代社会が抱える諸問題に対処していこうとする場合、イメージから一歩進んで地域を総合的に理解する必要がある。その際に有効なのが、地誌学的アプローチである。地誌学は地理的条件の複合性を構造的に把握して地域現象を説明し、地域性を明らかにしようとする分野である(矢ヶ崎ほか 2007)。

日本におけるカナダ研究は、日本カナダ学会が設立された1970年代以来、着実に発展を遂げており、さまざまな分野で多くの成果が発表されてきた。また、綾部・飯野(2003)や日本カナダ学会(2008, 2009)など初学者を主たる対象としてカナダ理解に資することを目的とした文献も近年刊行されている。しかし、これらの文献はさまざまな学問分野で活動する研究者たちがそれぞれの専門とする分野やテーマについて解説したもので

*関西学院大学国際学部准教授

あり、カナダを構成する諸要素がどのように相互にかかわっているかということの説明するものではない。また、これまでの研究の多くは多文化(社会)や社会統合に関心が向けられており、より多様化かつ複雑化している現代カナダの姿を十分に描き切れているとはいえない。

次に、日本の地理学研究者によるカナダ研究をみてみよう。残念ながら、地理学研究者のカナダ研究への貢献はきわめて小さいと言わざるをえない。1980年代以降に出版された、容易に入手しうるカナダ地誌書はごくわずかである¹⁾。そのうちの1冊は、地理学におけるアメリカ・カナダ研究のパイオニア的存在である正井泰夫によるものであり、北アメリカの自然と社会に関する概説とアメリカ合衆国の地誌に続いて、産業、交通、都市を中心にカナダの特徴を描いている(正井1995)。また、都市地理学や経済地理学の分野で多くの業績がある林上は、カナダを代表する地誌テキストを参考に本格的なカナダ地誌を著し(林1999)、さらに国際比較を念頭におきつつ、カナダ都市の特徴をさまざまな都市を取り上げて考察している(林2004)。個別の都市については、2010年に冬季オリンピックが開催されたバンクーバーの魅力を紹介した香川(2010)がある。

一方、カナダでは大学テキストとしても使われる地誌書の出版はさかんであり²⁾、たとえば最近のものだけでも、McCann and Gunn(1998)、McGillivray(2006)、Bone(2008)などを挙げるができる。これらはいずれも前半でカナダ全土の自然的基盤や歴史などを検討し、後半でカナダをいくつかの地域に区分し、それぞれの地域的特色を考察している。カナダでは一般に、東から大西洋カナダ(ニューファンドランド・ラブラドル、プリンスエドワードアイランド、ノヴァスコシア、ニューブランズウィックの各州)、ケベック州、オンタリオ州、平原諸州(マニトバ、サス

カチュワン、アルバータの各州)、ブリティッシュ・コロンビア州と区分し、また極北の3準州を一括して扱うことが多い。ただし、大西洋カナダに含まれる4つの州のうち、ニューファンドランド・ラブラドル州は1949年になってカナダに加入するなど、他の3つの州とは歴史的経緯が異なるため、McGillivray(2006)はニューファンドランド・ラブラドル州のみを単独で扱っている。なお、現代日本の地誌では多くの場合、南から順に北へ機械的に記述されていくのが一般的であるが、ここに挙げたカナダ地誌書で興味深いのは、オンタリオ州ないしケベック州から記述が始められている点である。そこには、中心と周辺とのコントラストが非常に大きいというカナダの特徴が反映されている。実際、これらの地誌書では中心と周辺、あるいは東部と西部とのあいだのコントラストが強調されてきた。

なお、日本地理学会会長を務める地理学界の重鎮であり、1970年代からカナダの農村を調査してきた田林明は、本稿と同様の関心から、日本の中学校や高等学校の地理教科書におけるカナダに関する記述を整理するとともに、カナダで刊行された地誌書に基づいて、カナダの地域性を検討した(田林2006)。それによると、教科書の分析からは、物理的大国、豊かな自然と天然資源・農産物、北方の国、少ない人口、複雑な民族国家、経済的先進国、都市化社会、平和な国、短い歴史、大きな地域格差、アメリカ合衆国との密接な関係—南北に働く力—、カナダの独自性—東西に働く力—などをカナダの一般的性格として挙げるができるという。また、カナダで刊行された地誌書はいずれも、カナダを多様で相互に異なった複数の地域を含む一つの国家ととらえているという。

本稿は、以上の議論を参考にしながら、将来のカナダ地誌作成の第一歩として、カナダ地誌研究

1) いうまでもなく個別の研究成果は学術論文として学会誌や大学紀要、商業誌などに掲載されているし、図書館に備えつけられるような高価なシリーズにもカナダ地誌を扱っているものがある。

2) 日本では中学校社会科や高等学校地理歴史科の教員免許状を取得する教職課程において地誌は必修であり、多くの大学で地誌の講義が開講されている。それにもかかわらず、こうした講義向けのテキストの出版は近年まで低調であった。しかし、最近になって教職課程で必修となっている科目に対応するかたちで地理学基礎シリーズ(全3巻)が刊行されたのに続き、2011年には世界地誌シリーズとして、日本、中国、EU、アメリカの4冊が刊行されている(いずれも朝倉書店刊)。

の課題を探ることを目的とするものである。まず、基礎データに基づいてカナダの特徴を概観したのち、現代カナダをとりまく諸要素を示し、カナダ地誌研究に求められている課題を検討する。

Ⅱ 基礎データからみる 現代カナダの諸地域とその特徴

図1はカナダ各州および準州の位置を示したものであり、表1はカナダ全土および各州・準州の諸指標を示したものである。これによると、世界第2位の国土面積を誇るカナダの面積（水面を含む）は約998万km²におよんでいる。一方で人口は3400万強であり、人口密度は1km²あたりわずかに約3.4人となっている。しかし、緯度の高いカナダでは人が暮らせる土地ばかりではなく、北緯60度以北に位置する3つの準州の人口密度はいずれも1km²あたり0.1人にも満たない。カナダではアメリカ合衆国との国境線沿いに人口のほとんどが集中しているところに大きな特徴がある。

次に、州ごとに面積や人口の規模が非常に大きく異なることにも注意を向ける必要がある。沿海諸州とよばれるプリンスエドワードアイランド、ノヴァスコシア、ニューブランズウィックの3つの州は、いずれもカナダの他州と比較して面積が小さく、人口も100万に満たない規模である。もっとも多くの人口を擁するのはオンタリオ州であり、1300万を超える人々が居住している。つまり、カナダ全体の3分の1以上が集中していることになる。オンタリオ州も人口密度は1km²あたり約12人にすぎないが、人口が州全体に分散しているわけではなく、カナダ最大の都市トロントをはじめ、オンタリオ湖とエリー湖、ヒューロン湖に囲まれた南オンタリオにかなりの部分が集中している。次に人口が多いのがケベック州であり、約790万人が居住している。ケベック州でも、カナダ第2の都市モントリオール（フランス語ではモンリアルと発音する）を中心に、セントローレンス川流域に人口が集中している。さらに、カナダ第3の都市バンクーバーのあるブリテ

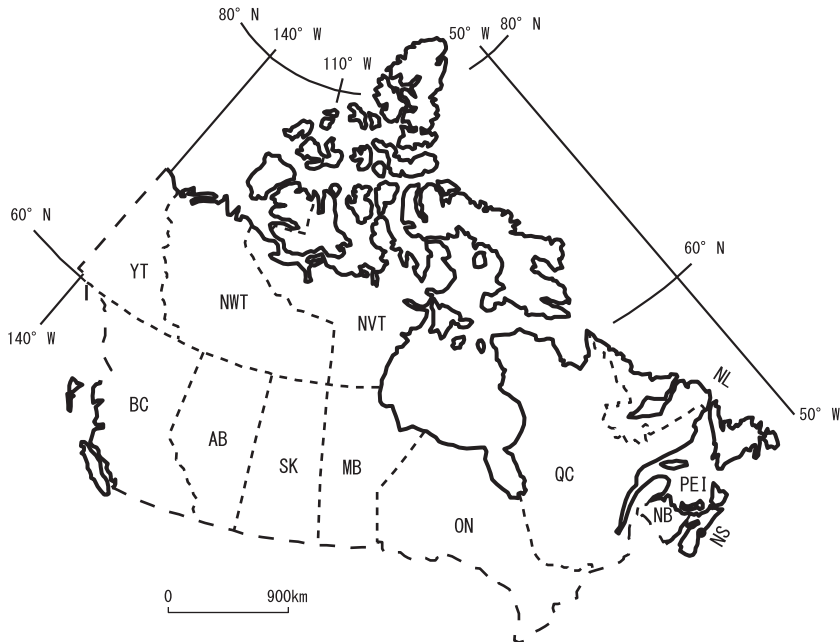


図1 カナダ各州および準州の位置と名称

NL：ニューファンドランド・ラブラドル州 PEI：プリンスエドワードアイランド州 NS：ノヴァスコシア州 NB：ニューブランズウィック州 QC：ケベック州 ON：オンタリオ州 MB：マニトバ州 SK：サスカチュワン州 AB：アルバータ州 BC：ブリティッシュ・コロンビア州 NWT：ノースウエスト準州 YT：ユーコン準州 NVT：ヌナヴト準州

表1 カナダおよび州・準州の諸指標

州・準州名 (略称)	面積 (km ²)	人口 (人)	65歳以上人口の割合 (%)	移民の割合 (%)	フランス語を母語とする人口の割合 (%) ¹⁾	英語とフランス語を理解する人口の割合 (%)
ニューファンドランド・ラブラドル (NL)	405,212	509,739	15.2	1.7	0.4	4.7
プリンスエドワードアイランド (PEI)	5,660	142,266	15.6	3.6	4.0	12.7
ノヴァスコシア (NS)	55,284	942,506	16.0	5.0	3.6	10.5
ニューブランズウィック (NB)	72,908	751,755	15.8	3.7	32.6	33.4
ケベック (QC)	1,542,056	7,907,375	15.3	11.5	80.1	40.6
オンタリオ (ON)	1,076,395	13,210,667	13.9	28.3	4.1	11.5
マニトバ (MB)	647,797	1,235,412	13.8	13.3	3.9	9.1
サスカチュワン (SK)	651,036	1,045,622	14.6	5.0	1.7	5.0
アルバータ (AB)	661,848	3,720,946	10.6	16.2	1.9	6.8
ブリティッシュ・コロンビア (BC)	944,735	4,530,960	15.0	27.5	1.4	7.3
ユーコン準州 (YT)	482,443	34,525	8.4	10.0	3.7	11.4
ノースウエスト準州 (NWT)	1,346,106	43,759	5.5	6.9	2.4	8.9
ヌナヴト準州 (NVT)	2,093,190	33,220	3.0	1.6	1.3	4.0
カナダ全土	9,984,670	34,108,752	14.1	19.8	22.1	17.4

1) 単一回答のみ。

Canada Year Book 2011 により作成。人口と65歳以上人口の割合は2010年、それ以外は2006年。

イッシュ・コロンビア州、石油関連産業の発展が著しいアルバータ州が続いている。なお、65歳以上の高齢者人口の割合をみると、人口構成が特殊な準州を別にすると、アルバータ州が他地域と比較して極端に低い。具体的なデータは示しえないが、経済が好調で若い労働力が流入していることが背景にあると推測される。

居住者の文化的背景も州ごとに大きく異なっている。カナダは移民の国と考えられているが、移民の割合はオンタリオ州とブリティッシュ・コロンビア州で突出して高く、大西洋カナダやサスカチュワン州で低くなっている³⁾。カナダ屈指の都市地域である南オンタリオと、太平洋に面しアジアからの玄関口であるバンクーバーが外国からの移住者をひきつけていることを示唆するものである。

カナダは英語とフランス語とを公用語とする国家であるが、よく知られているように、フランス語を母語とする人々はケベック州に集中しており、ケベック州ではフランス語を母語とする人口が約8割を占めている。フランス語を母語とする

人口の割合が次に高いのはニューブランズウィック州であり、約3分の1がフランス語を母語とする人々である。それ以外の州ではフランス語話者の割合が高いとはいえないが、プリンスエドワードアイランド州やノヴァスコシア州の一部には古くから続くフランス語系コミュニティがあり(大石 2006 a)、1904年までフランスが漁業権を有していたニューファンドランド島西岸にもフランス語系コミュニティが存続している(大石 2002)。オンタリオ州以西のフランス語系コミュニティはケベック州からの移住者によって形成されたものが多い。代表的なコミュニティとして1906年にグラヴェル神父を中心とする移住者たちによって建設されたサスカチュワン州グラヴェルプールがあり、立派な大聖堂が現存している。なお、オンタリオ州ではフランス語を母語とする人口の割合は約4%にすぎないが、人口規模が大きいため、実数ではニューブランズウィック州を上回るフランス語話者が存在している。

フランス語を母語とする人口がケベック州とニューブランズウィック州に集中していることは、

3) この数値は外国からの移住者を示すもので、アメリカ合衆国のように、文化的な違いの少ない地域からの移住者も含まれている。

英語とフランス語の両方を理解することのできる二言語話者の分布に偏りがみられることに関連している。表1によると、カナダ全土で二言語話者は17.4%であるが、その多くはフランス語を母語とする人口の割合が高いケベック州とニューブランズウィック州に集中している。カナダではフランス語が英語と並んで公用語となっているが、伝統的にフランス語の地位は低く、かつてはフランス語話者が英語を習得して二言語話者になる場合がほとんどであった。その結果、一部の地域をのぞいて英語話者との接触が少ないケベック州以外の州では、公用語のうちフランス語のみを理解する人はほとんど存在しなくなった。しかし、1969年にフランス語が英語と並ぶ公用語とされたことで、連邦政府機関やそれに準じる民間の機関（たとえば空港など）では二言語でのサービスが義務づけられ、英語圏の諸州においてもとくに州都クラスの都市で二言語話者の需要が高まった（大石 2006 b）。英語話者の子弟をフランス語で教育するイマージョン・プログラムは人気が高く⁴⁾、英語を母語とする二言語話者も増加している。表1からわかるように、ケベック州とニューブランズウィック州以外の州ではフランス語を母語とする人口の割合よりも二言語話者人口の割合が高くなっている。しかし、フランス語が実際に可視的といえるのはケベック州とニューブランズウィック州、それにオンタリオ州とケベック州にまたがる首都圏（オタワ・ガティノー大都市圏）くらいであることには変わりがない。

Ⅲ カナダ地誌研究の課題

(1) 現代カナダをとりまく諸要素

以上をふまえて、カナダ地誌研究の課題を考えよう。図2は、現代カナダをとりまく諸要素を示したものである。まずカナダは多様な自然環境のもとにあり、それは中心と周辺のコントラストをなす基盤となった。セントローレンス川流域には肥沃な土地が広がり、かつ鉄道が敷設される

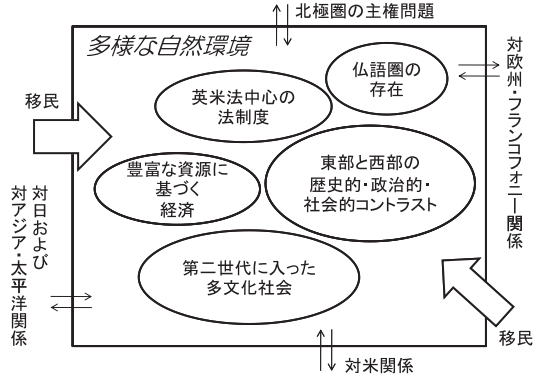


図2 現代カナダをとりまく諸要素

以前はセントローレンス川がハイウェイの役割を果たしたため、セントローレンス川流域には人口が集中し、カナダの中心地域として発展した。一方、カナダ楯状地は氷河の作用によりやせた土地であり、しかも高緯度に位置するため寒冷で農業には向いていなかったが、毛皮交易で重宝されたビーバーなどの小動物が多く生息し、森林や鉱物資源にも恵まれていた。そこで、カナダ楯状地は中心地域に資源を供給する役割を担うことになった。こうして形成された中心周辺構造は現在に至るまで変わっていない。

また、カナダへのヨーロッパ人の入植と開発が東部から始められたこともその後のカナダの地域形成に大きくかかわっている。1763年のパリ条約によりフランスが北アメリカから撤退し、現在のカナダの領域はイギリスの支配下に入った。その後、アメリカ独立革命によってイギリス王室に忠誠を誓うロイヤリストが流入したことで人口が急激に増加し、ノヴァスコシア植民地からニューブランズウィック植民地が分離したり（1784年）、現在のオンタリオ州の原型となるアッパー・カナダ植民地が創設されたりした（1791年）。これらのイギリス領北アメリカの諸植民地は相互の交流がほとんどなかったが、アメリカ合衆国における南北戦争を契機に連邦結成の機運が高まり⁵⁾、1867年に連合カナダ（連邦結成時にオンタ

4) すでに英語に同化したフランス系住民が子どもをイマージョン・プログラムに通学させて、フランス語を習得させる例も多い。
5) 南北戦争とカナダの連邦結成とのかかわりについては細川（2011）が詳細に検討しており、アメリカ側の視点を取り入れる意義を示唆している。

リオ州とケベック州に分離)、ノヴァスコシア、ニューブランズウィックの各植民地がカナダ自治領を結成した(これをコンフェデレーションという)。その後、イギリス本国の意向もあって、1871年にブリティッシュ・コロンビア植民地、1873年にプリンスエドワードアイランド植民地がそれぞれ連邦に加入した。

このように、カナダ東部に位置する諸州は連邦結成の時点までにイギリス植民地としての歴史を有している一方で、カナダ西部はブリティッシュ・コロンビアを例外として連邦結成以後に開発がすすめられた。連邦結成時点では、カナダ西部はルパーツランドとよばれるハドソン湾会社領であった。1870年にマニトバ州が成立するものの、サスカチュワン州とアルバータ州の創設は1905年になってからである。こうした経緯もあり、たとえばカナダでは資源の管理は州の権限であるが、西部諸州には当初こうした権限が与えられていなかった。また、連邦下院の議員定数は人口規模に応じて配分されるため、開発途上で人口規模の小さかった西部は長い間、政治的に影響力をもつことができなかった。さらに、カナダ西部の開発はアメリカ合衆国でフロンティアが消滅した19世紀末から急速に進むことになるが、それを支えたのは内相シフトンの移民奨励策を背景にカナダを目指すことになった東ヨーロッパ出身の移民であった。こうしたことから、カナダでは東部と西部とのあいだには歴史的・政治的・社会的コントラストが伝統的にみられる。

しかしながら、こうした東西間の不均衡は今後変化していく可能性がある。西部ではアルバータ州を中心に石油関連産業が発展し、経済成長が著しい。アルバータ州の二大都市エドモントン(州都、約118万)とカルガリー(約124万)は大都市圏人口でトロント(約574万)、モントリオール(約386万)、バンクーバー(約239万)に次ぎ、オタワ・ガティノー(約124万)とほぼ同じ

規模になっており、もはや無視できない地位を築いている⁶⁾。また、ブリティッシュ・コロンビア州のバンクーバーは経済成長が見込まれるアジアとの窓口として今後も発展しそうである。もともとカナダは豊富な資源を国外に供給することで経済発展を遂げてきた側面があるが、カナダ楯状地で豊富に得られた森林資源や鉱物資源に、アルバータ州を中心とする石油関連産業が加わり、豊富な資源に基づく経済には今後も注目していく必要がある⁷⁾。

フランス語圏の存在も、カナダを特徴づける重要な要素である。カナダとしてはもちろんのこと、ケベック州は世界のフランス語圏において指導的役割を果たしており、ヨーロッパとの関係も深い。また、ケベック州は北アフリカやハイチなどフランス語圏からの移民を多く受け入れている。ケベック州では静かな革命とよばれる1960年代以降の政治・経済・社会の改革を経てカトリック教会の影響力が弱まり、出生率の低下が急速に進行した。フランス時代にさかのぼる家系の子孫が減少し、さまざまな文化をもつ移民が増加したことで、文化的な摩擦が目立つようになっていく⁸⁾。ケベックのカナダからの分離・独立を目指す(正確には主権獲得を目指す)動きも忘れてはならない。独立派政党は2011年の連邦下院選挙で壊滅的惨敗を喫し、州議会でも2003年以来野党に甘んじているように、政治的には小康状態になっているが、州レベルでは州民の関心が高い新党結成もあり、数年のうちに大きな変化がみられる可能性もある。

1970年代初頭に導入された多文化主義はカナダの国是であり、現在でも重要な要素である。多文化主義には多くの日本人研究者が関心を寄せ、すでに多くの研究成果があるが、ここで注目したいのはカナダの多文化主義が第二世代に入っていることである。とくにヴィジブル・マイノリティとよばれる有色人種の場合、カナダ生まれの二世

6) 数値は2010年(*Canada Year Book 2011*による)。なお、*Canada Year Book 2011*によれば、カルガリー大都市圏の人口は2009年にオタワ・ガティノー大都市圏を上回って4位となっている。

7) カナダのエネルギー資源に関する簡単な解説として、廣松(2007)がある。

8) ケベック州を代表する研究者を主査とする調査委員会が設置され、現状の分析と将来に向けた提言がなされた(ブシャール・テイラー 2011)。

でも外見は移民のようにみえる可能性が高い。彼らはカナダ社会のなかでどのような立場におかれるのだろうか。とくに都市スケールにおいて、第二世代に入ったことによる多文化社会の変容は興味深い課題となろう。

最後に、北極圏の主権問題を重要な課題として指摘しておきたい。地球温暖化の影響により、夏季には北極圏の氷がとけ、北極航路が現実に利用されるようになりつつあり、カナダのみならず、ロシアやアメリカ合衆国、北欧諸国が関心を寄せている。北極の開発がカナダおよび世界にどのような影響を及ぼすのか、注視すべき課題である。

(2) 比較の視点

先に述べたように、カナダで刊行された地誌書の場合、前半でカナダ全土の自然的基盤や歴史的背景を概観し、さらにいくつかの地域に区分して地域の特徴を明らかにしていく構成が一般的である。しかし、自国の人々が必要とする内容と、外国人が必要とする内容とは異なるのが当然であろう。

外国人による地誌の例として、おもにアメリカ人を読者対象としたアメリカ人研究者によるヨーロッパ地誌（ジョーダン＝ピチコフ・ジョーダン 2005）が参考になる。そこでは、ヨーロッパの定義に始まり、自然的基盤、歴史、人々の特徴、宗教、政治、産業、都市などがアメリカとの比較をまじえて詳細に検討される。アメリカとの比較を考慮に入れるなら、外国人の読者はアメリカの事情をある程度理解しているほうが望ましいが、外国人が読んで非常に参考になる構成と内容である。

日本で刊行する外国地誌においても、すでに正井（1995）が副題を「日本の視点」としているように、やはり日本との比較は重要な要素になろう。私たちは無意識であっても、日本との比較でものごとを観察しているし、日本と比較することでその意味が理解できることも多い。たとえば、モントリオールは現地では湿度の高い地域と考えられているが、年平均降水量は約 1000 mm であり、日本の太平洋側の地域と比較するとあまり多いとはいえない数値である。また、一般に北アメ

リカでは西経 100 度を境に湿潤の東部、乾燥の西部とされるが、日本と比較して考えれば西部の乾燥がかなりの程度であることが容易に理解できよう。

日本におけるカナダ地誌の構成では、カナダで刊行される地誌書で求められるような細かい記述は必要ないかもしれないし、カナダないし北アメリカというスケールで理解すべきことがらも多いかもしれない。一方で、田林（2006, 2007）がカナダで刊行された地誌書に基づいて指摘しているように、カナダの居住地域は非連続的であることに特徴がある。またケベックのように歴史的経緯から独自の社会を維持している地域もある。そこで、カナダ全土ないし北アメリカというスケールで一定の説明をおこなったうえで、諸地域に区分して地域ごとの特徴を明らかにしていくことが日本におけるカナダ地誌でも必要な作業と考えられる。そしてそこに、日本との比較を盛り込んでいくことも必要とされよう。

IV おわりに

本稿では、カナダ地誌作成の第一歩として、基礎データに基づいてカナダの特徴を概観したのち、現代カナダをとりまく諸要素を示し、カナダ地誌研究の課題を検討した。そして、外国人による地誌作成には比較の視点が重要であることを指摘するとともに、カナダの特徴をふまえると、カナダ地誌の構成としてカナダ全土あるいは北アメリカというスケールにおける説明とともに、地域ごとの特徴を明らかにしていく作業が必要であるとした。

外国地誌の作成は容易なことではない。必要とする資料がきわめて多岐にわたるとともに、自然環境や歴史、産業、文化など、多くの分野の幅広い知識が必要とされることもその一因である。一方で、国際地域理解の促進を目的とする学部や学科も多くなっており、バランスよく正確に地域を理解するための方法として地誌学が果たすべき役割は大きく、良質な地誌書の刊行が求められている。本稿では雑駁な議論にとどまってしまったが、将来のカナダ地誌の作成に向けて、今後も検討をつづけていくつもりである。

付記 本稿の作成にあたり、平成21～23年度科学研究費補助金若手研究(B)(課題番号21720302)および平成23～26年度科学研究費補助金基盤研究(A)(課題番号23242052)の一部を使用した。

文 献

綾部恒雄・飯野正子編 2003.『カナダを知るための60章』明石書店。
 大石太郎 2002. カナダ, ニューファンドランド・ラブラドル州におけるフランス語系住民の言語継承. カナダ研究年報 22: 73-81.
 大石太郎 2006 a. カナダ, ノヴァスコシア州におけるフランス語系住民アカディアンの居住分布と言語使用状況. 琉球大学法文学部人間科学科紀要 人間科学 18: 93-119.
 大石太郎 2006 b. カナダの英語圏都市におけるフランス語系住民の言語維持とフランス語系コミュニティの発展-ノヴァスコシア州ハリファックスの事例-. 地学雑誌 115: 431-447.
 香川貴志 2010.『バンクーバーはなぜ世界一住みやすい都市なのか』ナカニシヤ出版。
 ジョーダン=ピチコフ・ジョーダン著, 山本正三・石井英也・三木一彦訳 2005.『ヨーロッパ文化地域の形成と構造-』二宮書店。
 田林明 2006. カナダの地域性. 人文地理学研究 30: 41-68.
 田林明 2007. カナダのイメージと性格. 歴史と地理

603: 33-42.

日本カナダ学会編 2008.『新版 史料が語るカナダ-1535-2007-』有斐閣。
 日本カナダ学会編 2009.『はじめて出会うカナダ』有斐閣。
 林上 1999.『カナダ経済の発展と地域』大明堂。
 林上 2004.『現代カナダの都市地域構造』原書房。
 廣松悟 2007. カナダのエネルギー資源-現状と今後の展望-. 歴史と地理 603: 52-56。
 ブシャール・テイラー編, 竹中豊・飯笹佐代子・矢頭典枝訳 2011.『多文化社会ケベックの挑戦-文化的差異に関する調和の実践 ブシャール=テイラー報告-』明石書店。
 細井道久 2011. 南北戦争とカナダ. アメリカ史研究 34: 66-83。
 正井泰夫 1995.『改訂版アメリカとカナダの風土-日本の視点-』二宮書店。
 矢ヶ崎典隆・加賀美雅弘・古田悦造編 2007.『地誌学概論』朝倉書店。
 Bone, R. M. 2008. *The Regional Geography of Canada*, 4th ed. Toronto: Oxford University Press.
 McCann, L., and Gunn, A. eds. 1998. *Heartland and Hinterland: A Regional Geography of Canada*, 3rd ed. Scarborough, ON: Prentice-Hall Canada.
 McGillivray, B. 2006. *Canada: A Nation of Regions*. Toronto: Oxford University Press.